

自分のために富を積んでも

（ルカによる福音書12：13～21、箴言30：7～9）

今朝は、ルカによる福音書12章13節から21節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、『愚かな金持ち』のたとえ」と言う小見出しがついた個所が、説教のテキストになります。今日の箇所は、「群衆の一人が言った」と言う書き出しをもって始まっています。ここに出て来る群衆とは、12章1節で、「とにかくするうちに、数え切れないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった」と述べられていた、あの群衆です。主イエスは、そこで、家督相続や遺産分配と言った、世俗の法に関するお話でもされていたのかと言うと、全くそうではないのです。もっと高次元の、信仰に関する、中でも特に、聖霊に関するお話を、主に、弟子たちに向かって、話しておられたのです。彼は、それを、傍らで聞いていたのです。でも、聞いてはいても、主イエスのお話そのものは、全くの上の空で、この時の彼は、自分が抱える問題で頭が一杯になっていて、主イエスにそれを訴えるチャンスを、今か今かと窺っていただけなのです。彼は、主イエスが一息つかれた隙を見て、場違も甚だしい、それが極めて私的な話であることなど、一切顧みることもなく、全く内輪の話を、話し出し、主イエスに、仲裁を求めたのです。それが目下の、彼の最大問題であり、寝ても覚めても、それが彼の心を悩ませ、一時も、彼の頭から離れることがなかったのです。

彼は、堰を切ったように、夢中になって、こう切り出しました。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください」と。普通こう言う問題は、律法の専門家、ラビに解決してもらいものなのですが、恐らく彼は、主イエスをラビと考え、ここでは先生と呼んではいますが、心ではラビと考え、それも凄腕のラビと見込んで、こう切り出したのでしょう。多分、主イエスの人気を見て、また、その弁舌を聞いて、彼は、そう判断したものと思われまふ。遺産相続を巡って兄弟が争うと言う話は、どこにでもある話です。決して珍しい話ではありません。それは、法に則って裁く以外に方法はありません。ユダヤには律法があり、それによると、長男は遺産の半分を相続し、残りを他の兄弟で分け合うことになっていました。だから、彼にも相続権はあったのです。でも、兄が、何かにか理由をつけて、遺産を独り占めして、全く分けてくれなかったのか、それとも、上手く誤魔化して、僅かしか分けてくれなかったのか、この話だけでは何も分かりませんが、いずれにしても、彼には、大いに不満だったのです。彼は、主イエスに期待をかけていたものと思われまふ。この方は何であれ、誰であれ、偏らずに、公平に裁かれる。強きをくじき、弱きを助ける義侠心に富んだ、常に、弱い者の味方である。だから、必ずや自分にも味方して下さると、そう信じて疑わなかったに違いありません。ところが主イエスは、彼の期待に反し、意外なことを言われました。14節を読んでみましょう。

「イエスはその人に言われた。『だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか』と。私たちは、使徒信条のイエス・キリストの項で、復活後の主イエスのことを、「天に昇って、全能の父なる神の右に座しておられます。そこから来て、生きている者と死んでいる者とを審かれます」と告白しています。主イエスは、確かに、裁判官、裁くお方ではありたまいます。でも、それは最後の審判を司られる裁判官、世界、歴史、全人類の最終、最高の審判者なのです。そのようなお方を、極度に矮小化して、自分の相続を巡る、極めて私的で、しかも、大いに欲得の絡んだ、下世話な問題に、引き込み、関わらせ

ようとは、何とも非礼極まりないことではあるのですが、それに、彼は、全く気付いていないのです。主イエスは、それとなく、彼に対し、先ず、その事実気付かせようと、あのように問い返されたのです。

それに続いて、主イエスは、今度は、彼一人ではなく、そこにいた一同に向かって、こう言われました。15節です。「そして、一同に言われた。『どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである』」。確かに、主イエスに仲裁を求めた者の兄は貪欲です。遺産を独り占めするか、誤魔化すかして、弟の彼に、正当な分配を拒むのですから、彼の兄の貪欲は否定できません。では、主イエスに仲裁を求めた弟の彼は、貪欲とは無縁か、と言うと、そうではないのではないかと、主イエスは言われるのです。大体、こんな問題を、公の場に持ち出して、恥ずかしげもなく、主イエスに仲裁を求めると言う、こうした行為自体が、何より、彼の隠された底なしの貪欲を証明している、と、そう見て、よいのではないのでしょうか。だから、主イエスは言われるのです。「どんな貪欲にも」と。あの人の貪欲、この人の貪欲、と言うのではないのです。誰の心にも潜んでいるあらゆる貪欲、それに注意を払い、用心しなさい、と主イエスは言われるのです。何故でしょうか。

コロサイの信徒への手紙3章5節に、「貪欲は偶像礼拝にほかならない」と言う言葉が出て来ます。貪欲は、お金が、財産が、この世の宝が、神様になってしまうので、だから貪欲は偶像礼拝だ、と言われるのです。これさえ持っておれば、もう安心だ。最早何も怖いものはない、と思わせる所に、この世の宝の落とし穴があるのです。それが、どんなに大きな落とし穴か、このことをよく分からせるために、主イエスは、16節以下で、一つの譬え話を語られます。読めば、何の説明もなしに、誰もが直ぐに、理解のできる、至って平易な譬え話です。もう一度、読んでみますから、聞きながら、それぞれに想像力を働かせ、イメージを膨らませていただきたいと思います。

「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』』と思い巡らしたが、やがて言った。『どうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』』と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ」。豊作の時、蓄えておく、と言う話で、直に思い出されるのは、創世記37章以下に出て来るヨセフの話です。兄弟に謀られ、人買いに売られ、エジプトに連れて行かれたヨセフは、エジプトの王・ファラオの侍従長ポティファルの奴隷となったのですが、ひよんなことから、ヨセフの知恵が注目され、求められるまま、ファラオが見た夢を解き、エジプトに7年の豊作の後、7年の凶作が来ることを予言して、ファラオに認められ、早速、その対策を託され、即座に、その権限を与えられ、一躍、エジプトの宰相の地位に就き、直ちに辣腕を揮い、7年の豊作の間、国中に穀物の貯蔵庫を設け、次に来る7年の凶作に備えました。彼の予言は的中し、彼は、その蓄えによって、エジプト一国を救っただけでなく、周辺の諸民族をも救うことになりました。その中には、彼の出身民族ヘブライ人も含まれていました。あるから全部使う、と言った無計画より、凶作の時に備え、蓄えておくと言うことは、人間にとって大切な心得であり、欠かせない知恵です。だから、この譬えに出て来る金持ちは、考え方としては、決して間違っていないのです。がしかし、そこまでは大変に良かったのですが、その後が宜しくありませんでした。それも、甚だしく宜しくありませんでした。

では、何が宜しくなかったのかと言うと、彼が、心の中で、こう呟（つぶや）いたことです。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。彼の呟きの第一の問題点は、彼が、ただ自分一人の幸せしか考えていなかった、と言う点です。彼の眼中には、周囲の人々のことは、つまり、隣人のことは、全く何も入っていないのです。ただただ自分一人が安楽に過ごせれば、それでいい、と言う徹底したエゴイステイクな態度です。ヨセフの場合は、勿論、立場の違いはありましたが、同じく蓄えるとは言っても、それは、一国を幸せにするだけでなく、周辺の諸民族をも救うことになりました。だから、彼の遣ることは益々神に祝福され、更に、一層、豊かな実を結ぶことになったのです。

第二の問題点は、彼の眼中には全く神が存在しなかった、と言う点です。彼は、まるで自分一人で豊作を勝ち取ったかのように錯覚し、だから、これは全部自分一人で占有してよいと考えました。確かに、彼は彼なりに一生懸命働いたのでしょう。だから、大いなる収穫は、その努力の結果でもありました。でも、それだけではなく、天候に恵まれ、落ち着いた平和な時代であったればこそ仕事に没頭もでき、また、沢山の良き協力者も得られた、と言った、様々な行幸に恵まれた結果だと、彼が、もし、少しでも考え、ひっくり返してこれら一切を恵みとして捉えていれば、先ず、神に感謝したでしょうし、その思いが本当ならば、神に捧げものがなされたでしょうし、多少でも、周囲の人々に、何らかの形で、お裾分け的なものがあつたのではないのでしょうか。そんなことをやった形跡がどこにも見当たらない彼の態度から、彼の生き方は、完全に神抜きでの生き方であったことが分かります。それが、露わになり、深刻な問題になるのは、彼が死ぬ時です。

と言うわけで、第三の問題点は、彼が自分の人生を考える時、全く、自分が何時か必ず死ぬのだ、と言うことを計算に入れていないか、入れていても、死を、極々安易に考えていたと言う点です。「ついに行く 道とはかねて 聞きしかど 昨日今日とは 思わざりしを」と詠んだのは在原業平ですが、この譬え話に出て来る金持ちも、神に、「今夜、お前の命は取り上げられる」と言われて、きっと、大いに慌てたことでしょう。その時になって、ちょっと待ってください、とは言えないのです。でも、日頃から、「我らの国籍は天にあり」（フィリピ 3：20 文語訳）との意識を強く持って生きていたならば、それ程に、この世の宝に執着することもなく、至って淡々と、この世を去ることもできるでしょうが、この譬えの金持ちのように、この世の宝を何よりも大切なものとする者にとっては、こうした死の宣告は、極めて堪え難いものとなるに違いありません。

或る人が、死と言うものを、数式をもって、このように定義しました。死とは、加減乗除や括弧を幾つも繰り返して、それを最後に大きな括弧で包み、その前にマイナスの記号を付ける、言わば、死とは、そうした大括弧の前に最後に付けられるマイナスのようなものだ、と。括弧の中が、たといプラス、プラスと、プラスを重ね、信じ難い数字になつたとしても、最後に、それが括弧で括られ、その前に、死と言うマイナスの記号を付けられるならば、それは結局マイナス、と言うことになるのではないかと、言うのです。主イエスがなされた譬え話の金持ちの生き方は、正に、その典型だと言ってよいのではないのでしょうか。あんなにも沢山の財産を持ちながら、その全部を地上に置いて、自分は何ひとつ持たずに裸の状態に天に旅立ち、その裸の状態のまま神の御前に立つことになるのです。その裸の状態とは、肉体は滅び、今や魂だけとなっているのですが、その魂たるや、徹底的に自己中心的に生きてきたため、例えようもなく貧弱で、みすぼらしい、醜悪な魂なのです。彼は、神の前に富むことをせず、只管（ひたすら）人の前に、否、自分の前にだけ、富むことに熱中したために、こうした結果になってしまったのです。神の前に富む、と言うこ

とに関し、テモテへの手紙一6章17節から19節に亘って、このような言葉が述べられています。「この世で富んでいる人々に命じなさい。高慢にならず、不確かな富に望みを置くのではなく、わたしたちにすべてのものを豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。善を行い、良い行いに富み、物惜しみをせず、喜んで分け与えるように。眞の命を得るために、未来に備えて自分のために堅固な基礎を築くように」と言うのです。

ジョン・ウエスレーは、「神を持つ者は、すべてを持つ」と言いましたが、神を捨て、他のすべてを持ったとしても、人は誰でも死んだ後、神の前に立たねばならないのですから（ヘブライ人への手紙9：27参照）、結局は、何も持たないに等しい者になってしまうのです。だから、この譬えで、神は、彼（か）の金持ちに対して、「愚かな者よ」と、言われたのです。彼は、この世的に見れば、むしろ、賢い人、と、称賛されてしかるべき人です。でも、彼が人生設計を立てるに際して、その中に、死後のことを計算に入れず、神も隣人も視野の外に置いた彼は、神の目から見れば、愚か者にしか見えず、現に、本当に愚か者となってしまったのです。

とは言っても、富みは中々に魅力的です。これを持って、誘惑にかからぬ者は、殆どいません。今日私たちは、聖書朗読の折り、旧約聖書からは、箴言30章7節から9節までが読まれるのを聞きました。旧約の知者も、富みの魅力と誘惑の抗（あらが）い難さをよく知っていたのでしょう。だから、あのような言葉を書き残したものと思われまます。一つの知恵です。私たちも、この言葉をもって誘惑から身を守りたいと思います。しっかりと肝に銘ずべく、最後に、もう一度あの箇所を読みます。

「二つのことをあなたに願います。わたしが死ぬまでに、それを拒まないでください。むなしいもの、偽りの言葉を/わたしから遠ざけてください。貧しくもせず、金持ちにもせず/わたしのために定められたパンで/わたしを養ってください。飽き足りれば、裏切り/主など何者か、と言うおそれがあります。貧しければ、盗みを働き/わたしの神の御名を汚しかねません」。

(三輪恭嗣)